夏季企画展

淡路島発掘

日本遺産「国生みの島・淡路」認定５周年記念

2021.7.22 (holiday) Thu. → **8.29** Sun.

解説リーフレット

神話と歴史に彩られた淡路島が、日本遺産「国生みの島・淡路」認定５周年を迎えたのを記念して、これまでに調査された島内の遺跡の発掘成果をご紹介いたします。四方を海に囲まれた立地を特徴づける出土品と、そこから見えてくる古代の人びとの営みをご覧ください。

1. まるやま遺跡（淡路市岩屋）
2. 貴船神社遺跡（淡路市野島）
3. 富島遺跡（淡路市富島）
4. 舟木遺跡（淡路市舟木）
5. おぎわら遺跡（淡路市久野々）
6. 久野々遺跡（淡路市久野々）
7. 築鼻山１号墳（淡路市室津）
8. 禿山遺跡（淡路市白山）
9. 楠本下林遺跡（淡路市楠本）
10. 佃遺跡（淡路市浦）
11. 今出川遺跡（淡路市久留麻）
12. 引野遺跡（淡路市久留麻）
13. 釜口浜田遺跡（淡路市釜口）
14. 天神遺跡（淡路市志筑）
15. 田井Ａ遺跡（淡路市志筑）
16. 横入遺跡（淡路市志筑、中田）
17. 喜住西遺跡（洲本市五色町広石下）
18. 三木田池遺跡（洲本市中川原）

19. 二ツ石戎ノ前遺跡（洲本市中川原）
20. 下加茂遺跡（洲本市下加茂）
21. 下内膳遺跡（洲本市下内膳）
22. 波毛遺跡（洲本市納）
23. 古津路銅剣出土地（南あわじ市松帆古津路）
24. 平石遺跡（南あわじ市湊東）
25. 片山遺跡（南あわじ市松帆西路）
26. 鈩田遺跡（南あわじ市志知鈩）
27. 雨流遺跡（南あわじ市榎列大榎列～松帆志知川）
28. 木戸原遺跡（南あわじ市志知中島、市新、市三條）
29. 国分遺跡（南あわじ市八木国分）
30. 淡路国分寺（南あわじ市八木国分）
31. 楠谷遺跡（南あわじ市賀集野田）
32. 神子曽遺跡（南あわじ市賀集鍛治屋）
33. 曽根遺跡（南あわじ市北阿万筒井）
34. 井手田遺跡（南あわじ市阿万上町～阿万下町）
35. 九蔵遺跡（南あわじ市阿万東町～阿万西町）
36. 吉田南遺跡（神戸市西区森友）

日本遺産（Japan Heritage）とは

地域の歴史的魅力や特色を通じて我が国の文化・伝統を語るストーリーを「日本遺産」として文化庁が認定するものです。魅力ある有形・無形の文化財群をストーリーとして発信し、地域の活性化を図ります。

「国生みの島・淡路」～古代国家を支えた海人の営み～は平成28年４月に日本遺産として認定されました。

｜主　催｜ 兵庫県立考古博物館
｜共　催｜ 兵庫県立歴史博物館ひょうご歴史研究室
｜後　援｜ 淡路島日本遺産委員会

触れる・体感する、考古学のワンダーランド。
兵庫県立考古博物館
Hyogo Prefectural Museum of Archaeology

1 狩猟の時代から農耕の時代へ

淡路島の歴史の幕開けとなるのは旧石器時代で、約2万年前のサヌカイト製のナイフ形石器などが曽根遺跡（南あわじ市）で出土しています。石材のサヌカイトは大阪府・奈良県境の二上山や香川県の坂出市周辺で産出するもので、ちょうど中間にあたる淡路島では両方が使われたようです。石器に適した石材は、この時代でも遠くから運ばれてきていました。

縄文時代になると楠谷遺跡（南あわじ市）の有舌尖頭器※のような精巧な石器が作られます。また石鏃の出現は、狩りに弓矢を使うようになったことを意味します。楠本下林遺跡（淡路市）の石鏃はチャート※製で、これも島外から持ち込まれたものでしょう。

農耕が始まる弥生時代には平野部を大規模に開発するようになり、森林を伐採する石斧の形も、稲作文化とともに伝わった“蛤刃”や“柱状片刃”などの新しいタイプに変わります。

ナイフ型石器（左2点）・翼状剥片・剥片／曽根遺跡（南あわじ市）

有舌尖頭器／楠谷遺跡
（南あわじ市、同市蔵・写真提供）

チャート製石鏃／楠本下林遺跡
（淡路市、同市蔵・写真提供）

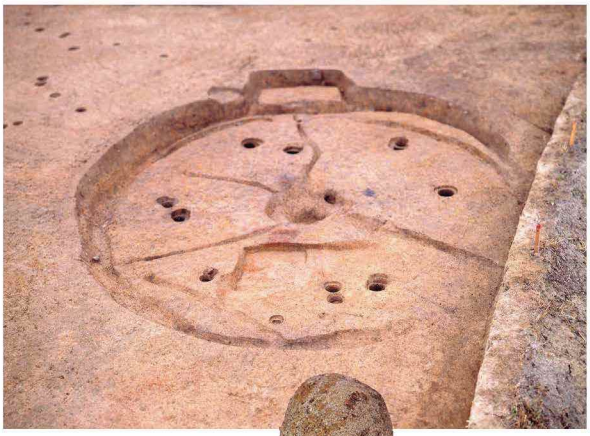
※有舌尖頭器
縄文時代草創期の刺突具で、柄の先に付けたものと考えられる。

※チャート
丹波層群でよく産出する岩石で、石器の材料に用いられる。

2 マツリの源流

富島遺跡（淡路市）出土の土面は、縄文時代の土俗的なマツリの一面を伝えます。マツリの道具には赤い色が用いられることが多く、佃遺跡（淡路市）や二ツ石戎ノ前遺跡（洲本市）では水銀朱を精製する道具（石皿・石杵）が見つかっています。下加茂遺跡（洲本市）出土の横杓子も全面が朱彩されていました。

金属を用いるようになる弥生時代には、南あわじ市の松帆銅鐸・古津路銅剣・鈩田遺跡の小形仿製鏡のように、銅鐸・銅剣・鏡といった青銅器がマツリのシンボルとなりました。



水銀朱精製の作業工房跡（上）と
L字状石杵（下）
二ツ石戎ノ前遺跡（洲本市）

横杓子出土状況／下加茂遺跡（洲本市）

小形仿製鏡（内行花文鏡）
鈩田遺跡（南あわじ市）

3 海をはさんだ交流と新しいマツリ

淡路島は、海を介して様々な地域との交流があり、弥生時代後期から終末期にかけては、大阪湾対岸の河内地域や四国の阿波地域などと共通の特徴を持つ土器が目に付くようになります。下内膳遺跡（洲本市）の大型の細頸壺は胎土や焼成からみて、まさに河内平野から舟に乗せて運ばれたものとみられます。一方、淡路型器台と呼ばれる独特の形の土器は、明石川流域の吉田南遺跡（神戸市）の他、和泉地域などでも出土が知られます。

古墳時代には焼き物や金属加工に関する新しい技術が大陸からもたらされて生活様式が一変し、それとともにマツリの形態も変化します。貴船神社遺跡（淡路市）の新羅（しらぎ）土器、木戸原遺跡（南あわじ市）の韓式系土器・毛抜き形鉄製品・鉄鋌・各種の滑石（かっせき）製品、雨流遺跡（南あわじ市）の子持勾玉はそうした時代を物語る出土遺物です。

弥生土器 細頸壺
下内膳遺跡（洲本市）

弥生土器 淡路型器台／下内膳遺跡
（洲本市、同市蔵・写真提供）

新羅土器　樽形土器の人面把手
貴船神社遺跡（淡路市）

子持勾玉
雨流遺跡（南あわじ市）

4 淡路国成立とマツリゴト

律令制が導入された7世紀後半以降、全国で国府や国分寺、そしてそれらを結ぶ官道の整備が進みます。現在も法灯を伝える淡路国分寺（南あわじ市）は8世紀中頃の創建で、創建時の瓦が紀伊国分寺と同笵（どうはん）※であり、南海道沿いに国家の施策が進められたことがうかがえます。当時の役人が使った硯が片山遺跡（南あわじ市）などから出土していて、郡や郷に属する役所が三原平野の各所にあったものとみられます。

田井A遺跡（淡路市）出土の人形（ひとがた）・舟形（ふながた）は、けがれを払って病や災厄から逃れるための祀（まつ）りに使われた祭祀具です。現代の神社で行われる大祓（おおはらえ）の源流といえます。

※同笵
笵とは軒瓦の文様の元になる型のことで、同じ型から作られた瓦を同笵瓦と呼ぶ。

淡路国分寺（奥）と国分遺跡（手前）
（南あわじ市、同市写真提供）

木製人形／田井A遺跡（淡路市）

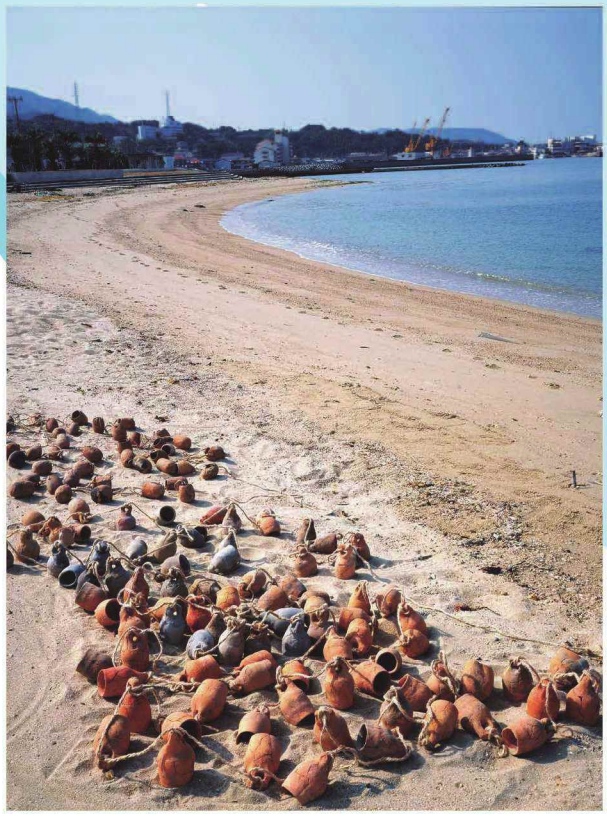
軒丸瓦・軒平瓦／淡路国分寺
（南あわじ市、同市蔵・写真提供）

中空円面硯／片山遺跡
（南あわじ市、同市蔵・写真提供）

5 海人の生業

豊かな海の幸を産み出す淡路島の海人の活動は、弥生時代後期頃から活発になります。舟木遺跡（淡路市）のヤス・釣針にみられるように漁具の鉄器化が進むと同時に、タコ漁や製塩の操業規模も古墳時代にかけて次第に拡大します。

律令期には「御食国」と呼ばれ、朝廷への贄として海産物の貢進が課されていました。それを裏付けるように引野遺跡・貴船神社遺跡・富島遺跡（淡路市）、雨流遺跡・九蔵遺跡（南あわじ市）など島内各所でおびただしい量のタコ壺や製塩土器が出土しており、平城宮でも淡路国から塩が送られたことを記した荷札木簡が見つかっています。



富島遺跡（淡路市）出土のイイダコ壺と野島付近の海岸線

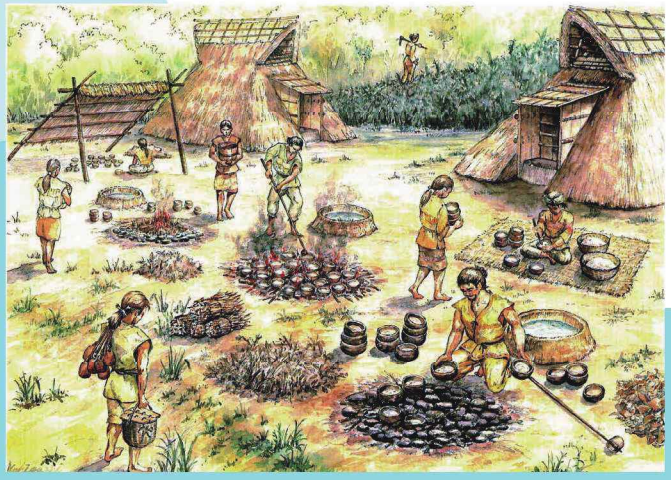
おわりに

日本最古の歴史書『古事記』の冒頭に登場する「国生み神話」では、伊耶那岐命・伊耶那美命の二柱の神が天沼矛を「コヲロコヲロ」とかき鳴らして引き上げると、矛からしたたり落ちた塩が積もって「淤能碁呂島」となり、その後、二柱の神が最初に生んだ島が「淡道之穂之狭別島」つまり「淡路島」であったと記されています。

瀬戸内海の東端に浮かぶ淡路島は、畿内中枢部からみると西日本各地との海上交通の中継地として、また海産物などを貢納する国として、早くから大和朝廷と密接に結びついていました。それが神話のスタート地点に位置づけられる一因であったのかもしれません。

今回の展示からそうした淡路島の世界観に思いをはせることで、皆さんが日本遺産「国生みの島・淡路」のストーリーに一歩でも近づけられたなら幸いです。

平城宮（奈良市）出土木簡赤外線写真（奈良文化財研究所蔵・写真提供）
表面（右）「淡路国三原郡阿麻郷戸主丹比部足」
裏面（左）「□同姓蓑麻呂調塩三斗 天平寶字五年」
の墨書があり、天平宝字五年（761）に
現在の南あわじ市阿万あたりの住人が、
奈良の都へ調（税の一種）として塩三斗を納めたことが記されている。



貴船神社遺跡（淡路市）の製塩作業風景（想像図）　作画：小東憲朗

令和３年度 夏季企画展
「淡路島発掘」解説リーフレット

編集・発行：兵庫県立考古博物館
〒675-0142 加古郡播磨町大中 1-1-1　TEL 079-437-5589
発行日：令和３年７月22日
印　刷：株式会社北星社
〒668-0061 兵庫県豊岡市上佐野 1620　TEL 0796-22-4141

03教Ⓟ2-002A4